

氏名	おのほるこ 小野治子
学位の種類	博士(看護学)
学位記番号	第21号
学位授与年月日	令和3年3月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者 看護学研究科看護学専攻
学位論文名	特定健康診査・特定保健指導における医療費抑制効果分析 Longitudinal analyses of medical care expenditure with adjustment of lifestyle habits and medication in a specific health check and its guidance
指導教員	赤星琴美 教授 甲斐倫明 教授
論文審査委員	主査：福田広美 教授 副査：佐伯圭一郎 教授・吉村匠平 准教授

論文内容の要旨

【目的】

生活習慣病の予防および医療費の適正化を図る目的に2008年に特定健康診査・特定保健指導が導入された。この制度において、生活習慣病の予防可能な対象者を健診で早期に発見し、さらに、その対象者に対して、生活習慣改善に向けて行われる保健師の保健指導に重点が置かれ、短期的に効果があることは明らかになっている。本研究では、A市における国民健康保険加入者の特定健康診査および医療費のデータを用いて、特定健康診査・特定保健指導における健診結果および生活習慣の長期的変化に着目し、医療費に与える影響を定量的に明らかにすることを目的とした。

【研究1】

特定健診・特定保健指導に関する経年的な効果について着目し、特定健診・特定保健指導に関する研究の動向と課題を明らかにするために文献検討を実施した。特定健診・特定保健指導の経年的効果に関する研究は、1年前後の短い調査期間の研究が多く、短期的な効果として、体重、腹囲の減少効果があることが示されており、その他のメタボリックシンドロームのリスク要因の効果は文献より異なり、長期的な特定健診・特定保健指導の効果について明らかになっていなかった。

【研究2】

A市に住む服薬をしていない健康的な一般住民745人を対象とし、2008年から2017年の10年における生活習慣の変化や体型の変化が生活習慣病へのリスク因子にどのように影響するのか一般化線形モデルを用いて実態を明らかにした。10年間に於いて男女ともに体重は減少し、腹囲は増加傾向を示した。また、腹囲の増加と生活習慣との関連は認められなかったが、腹囲が増加すると脂質代謝に関連する検査値は増加することを示した。加齢とともに腹囲が増加することを考慮した生活習慣病の予防対策の重要性が明らかとなった。

【研究3】

10年間の生活習慣および健康状態がその後の医療費に与える影響についてTobit分析により評価した。その結果、医療費を増加させる要因は、年齢、服薬の状況、20歳の時の体重より10kg以上の増加があること、一方、医療費を抑制する要因は、1日1時間以上の歩行習慣であることが明らかとなった。さらに、累積医療費を推定すると、服薬がなく、歩行習慣のある者の医療費が最も低額になることを明らかにした。

【結論】

特定健診・特定保健指導における10年間という長期的な経過変化の分析において、加齢とともに体重は減少し、腹囲は増加する傾向にあることが明らかとなった。また、10年間の特定健診・特定保健指導の医療費へ与える影響について、特に1日1時間の歩行は医療費抑制の効果が高いことが明らかとなった。これらの結果より、保健指導の実施により医療費抑制効果の可能性が示唆された。

Abstract

In 2008, specific health checkups and specific health guidance were introduced, for preventing lifestyle-related diseases and optimizing medical expenses. In this system, it has been clarified that has a short-term lifestyle-related improving effect, but a long-term effect has not been clarified. This study focused on the longitudinal impact on medical expenditure effects in a specific health check and its guidance. I conducted a longitudinal analyses of medical care expenditure with adjustment of lifestyle habits and medication in a specific health check and its guidance using the specific health check and medical expenditure data of residents of a city who were registered in the National Health Insurance in 2008. The first study aimed to analyze the relationship between changes in waist circumference (WC) due to long-term lifestyle and changes in metabolic risk factors in the middle-aged and elderly people. The results showed that body weight decreased and WC increased in both men and women during the 10-year period. Although there was no relationship between the increase in WC and lifestyle habits, the results showed that laboratory values related to lipid metabolism increased as WC increased. This study suggested the importance of considering lifestyle-related disease prevention with an awareness that waist circumference increases with age. The second study aimed to analyze the impact of lifestyle and medication status on medical expenditure. The results showed that age, medication for lifestyle-related disease, and weight gain from 20 years of age are likely to be associated with higher health care expenditure in general population. Moreover, it was suggested that walking over one hour a day was associated with lower health care costs in the general population.

論文審査の結果の要旨

本研究は、特定健診・特定保健指導における検診受診者の健康や医療費について、長期的な変化に着目した研究である。A市の特定健診受診者データおよび国民健康保険のレセプトデータをもとに、後ろ向き観察研究により10年間の体重や腹囲、生活習慣病等の変化、医療費抑制等の影響を分析している。本研究の新たな知見として、特定健診受診者の体重は、10年間で減少する一方で、腹囲は増加傾向を示し、腹囲の増加が脂質代謝に影響することを明らかにした。また、Tobitモデルを用いた医療費の分析により、特定健診受診者の1日1時間以上の歩行習慣が、医療費を抑制すること等も明らかにした。先行研究では、特定健診・特定保健指導における健康の変化や医療費への影響について、10年間という長期間のデータを分析した研究はこれまでになく、本研究で明らかにした知見は、特定健診受診者の生活習慣病改善や医療費抑制につながる重要なエビデンスとなる。以上より、本研究は、公衆衛生看護学分野における特定健診・特定保健指導の発展に繋がる新たな学術的研究として、博士論文に相応しいと判断した。